

令和6年度第2回緑区支えあいのまち推進協議会

議事要旨

1 日 時 令和7年3月22日（土）14時00分～15時30分

2 会 場 緑保健福祉センター3階 大会議室

3 出席者 委員 22名（欠席委員数 4名）

傍聴人 2名 事務局 11名

4 議 題

（1） グループワーク 地域での課題について（意見交換・情報共有）

（2） 広報誌「みどりのきずな」第42号について

（3） 令和6年度取組状況及び令和7年度計画作成依頼について

5 議事経過

開会にあたり、石井区長、岡本委員長より挨拶を行った。

議題（1）グループワーク 地域での課題について（意見交換・情報共有）

事務局より進み方についての説明後、グループワークを実施し各グループの発表を行い現状や取組について共有した。

【発表内容】

（Bグループ 平山地区町内自治会連絡協議会 豊田委員）

Bグループは今回4地区連協が参加しているが、その中で「横のつながり」について具体的に出た話としては、比較的新しくできた自治会と古くからある自治会の関係性が薄いということが挙げた。会長同士の世代間に違いがあり、話が合わないことがあるように思っている。比較的若い世代で構成されている自治会の考え方としては、全体で何か考えて実行するというよりは、個々の考え方を重視しているように感じられる。例えば夏祭りひとつを例にとっても、全体での実施は難しく、結局これまでやっていた同じ役員がやらなければいけなくなっている現状がある。

この会議でも今は各地区連協の会長が出席しているが、その中には地区部会や民児協にも関係している者がいるため、会長ではない連協の役員が出席した方が良いようにも感じている。

横のつながりについては乏しくなっている現状がどこの地区でも見られている。

(Cグループ 千葉市社会福祉協議会おゆみ野地区部会 角川委員)

Cグループは社協地区部会の委員により構成されたグループであるが、先ほどのBグループと同様に、考え方の違いもあり若い世代との交流がなくなっている現状がある。具体的に羅列すると、親睦会がなくなったこと、出来ない事については出来ないとはっきり言うようになったこと、地域の行事に興味がなく協調性を感じられないといったことが挙げた。コロナ禍以降に行事がなくなってしまう、段々それ以前の状況に戻ってはきているものの参加者は減っている現状があり、若い世代の支援者が減ってしまっている。これはSNSなどで必要な情報が自分で得られるため、組織に入るメリットが得られないという考えを持つ人が増えたことが要因ではないかと考えられる。高齢者の事情も変わってきており、70代や80代の方でも現役として働いている方も増えており、若い世代については夫婦共働きで奥さんも仕事に出ている家庭が増えている。そのような中で地域の行事に出てくださいとか、協力してほしい言うことも中々難しく、協調性がないというよりも時間的に難しいという世帯も増えているのではないかという意見もある。

おゆみ野地域のように新しい住宅ができてくると、多くの人が同じ時期に一斉に入ってくる。その状況では時間が経過していくと、子どもたちは出ていってしまい親世代だけが残され、みんなが一緒に年齢を重ねていくこととなり結果的に高齢者だけが地域に残ることとなる。そうしたことが交流機会の減少や、行事の継続性を難しくしているということに繋がっているのではないかという意見もあった。

そこでどうしたらいいのかということだが、若い世代とのコミュニケーションを図っていく必要があることや、行事の協力の働きかけの仕方を変える、例えば「お祭りの手伝いをお願いしたい」という全体を含ませた言い方ではなく、「この役割をお願いしたい」というような具体的な働きかけにすればいいのではないかという提案が挙げた。正直なところ、すぐに効果のある解決策は無いという意見が大半であった。

現在の活動の中では、夏休みのラジオ体操で小学生や幼稚園生が参加してくれている機会を捉えて、保護者として付き添いで来るお母さんたちと交流ができているという地域があった。また、老人会が子どもたちを集めてクリスマス会などを開催し交流を図っている地域があり、高齢者側から子供たち側に歩み寄るという視点が必要ではないかとの意見も挙げた。

(Aグループ 民生委員児童委員協議会511地区 久保委員)

Aグループは民生委員児童委員協議会のメンバーで構成されたグループであるが、地区部会の活動などにも参加している。地域の現状としては、男性が活動に出てこないことが多い、公民館が地域に無いと活動が少なくなる、地区部会の活動が固定したメンバーしかいないので他の方が入りやすいような仕組みを作る必要があるといった意見や、民生委員の成り手について男性が少ないこと、また、椎名地区では食育を行っており子どもたちとの交流はあるものの、親御さんたちとの交流がなかなか進まないといったことが挙

がった。

2つ目の議題を話している中では、定年後に地域に入り込むのは中々むずかしく、子育て中の世代が参加しやすい行事を作っていく必要があるのではないかという意見があった。イギリスの事例で「ベンチで一緒にお話ませんか」というステッカーを貼って、高齢者がちょっと立ち寄れるようなスペースを作るような活動があるとのことで、高齢者は話をするのが好きなため交流の場の一つになっているということを共有した。

3番目の議題については、町内にどのような方が住んでいるのかわからない、自治会の役員も1年で変わる場合が多く、住民の実態が分からないことが多い現状があるため、自治会の中で、地域にはどのような方がいて、その方がどのような趣味を持っているかなど住民の方のことがわかるような「人材バンク」のようなものがあるといいのではないかという意見があった。また、町内会館を無償で解放してほしい、他の方が入るとお金がかかるため利用しづらい現状があるのではないかと意見も出た。

現状のところで事例を一つ上げると、土気地区の中で友引の日を利用して葬儀屋さんの場所を解放しているという事例が挙げられた。これと同じように若葉区でも葬儀屋さんが無料開放している日があるということを知り、おゆみ野地域から若葉区のその場所を使用してもらい活動しているという事例もある。場所の確保における連携という意味では他の地域に目を向けていくなど、色々なやり方があるのではないかと思っている。

(木之内委員)

土気地区の葬儀屋さんの友引利用について補足しますと、友引の日は葬儀もないのでその日を利用してシニアリーダー体操や、その場所にコンテナを運んで簡単なカフェのようなものを行っている。葬儀屋さんの友引日利用は集いの場所の確保として非常に有効であると感じている。

(Dグループ 福邊委員)

Dグループは高齢者関係のグループで構成されている。まず1つ目の現状については、他のグループでも挙がっていた地域性の違いについて、昔からある地域と最近できた地域とでは繋がりが作りづらいこと、また、世代間での価値観の違いがあり繋がらなくてもSNSなどのツールがあるのでそれを利用して社会と繋がっていればいいという考え方があるため関係を構築していくことが難しいとの意見が挙がった。老人クラブ連合会では、連合会から脱退する老人クラブが多く、会としての活動が難しくなっており、新しい人も入って来ないため、次の世代への引継ぎもできないという事態が生じているということが挙がった。また、コロナや高齢化も進んだことにより地域の集いの場に行けない、大きい自治会であれば自治会館も足の問題の影響があり、そもそも行くことが難しいとの意見も挙がった。施設においてはコロナの関係でボランティアの受け入れが難しくなり地域との繋がりが薄れてしまったというようなことも挙がった。

2 番目と 3 番目の議題についてはまとめてになりますが、土気の方では学校の教頭先生からセーフティウォッチャーが不足しているといった話があり、腕章をつけて家の前に立ってもらえるだけでもありがたいということであるため、そういったことであれば声をかけやすいし協力いただけるのではないかという事で、今後声かけをやっていきたいという話が挙げた。また、世代間交流が必要であるが、目的がなくてもふらっと寄れる場所と、何らかの目的があって行く場所を用意し本人が選んでその場所に行けるようになることが大事ではないかという事で、これからそういった居場所づくりに取り組んでいけばいいのではないかと意見が挙げた。

(E グループ 小林委員)

E グループは障害者施設や当事者団体等による構成であるが、C グループの話にもあったように、コロナ禍によりボランティアの受け入れができなくなり、その後再開しても戻ってこない、その期間に活動を中止してしまっているということで地域の関係性が薄くなったということが感じられるという意見が挙げた。これまでの皆様の話にも出ているように、男性の方の交流が難しい、元々は他の地域に住んでいて、あすみが丘に移住し、東京に勤務して定年となったが家にも中々地域に交われない現状がある、女性に比べ男性はコミュニケーションの取り方が上手ではないということが挙げた。時代の流れで地域に集まる機会が多く良かったと思われた時代から、そういった関係性が煩わしいと思うような時代になった。コロナ禍以降またそういった繋がりが必要であるという考え方に少しずつなってきていると感じるものの、再構築が難しい状況になっているという声も挙げた。SNS等の通信手段が発達したことで地域と交わらなくても家族と連絡をとりやすくなり、自分で情報を取得して問題が解決できるような社会になってきた。しかしながら、きちんとそれを利用して実生活が便利になったかという、例えば障害を持っている人、中途障害になった方などは必要な福祉制度の情報が得られているかというところではない場合がある。うまく使っている方は外に出なくても家にいても繋がれている現状があるという話があった。

一つ素晴らしい取り組みと感じた事例で、大椎台団地での取組で男厨会、男子が厨房に入る会というのがあり、料理が趣味であるという人が自治会館に集まっており、料理を作るだけでなく、地域のこどもの集まりや防災訓練にもその方たちが出ていき料理を作るといった交流を実施しており、自分たちの趣味を生かしつつ地域の繋がりにも貢献しているといったところで素晴らしいと感じた。このように趣味を持つことが地域と繋がっていく一つのきっかけとして有効ではないかと思われた。

議題（2）広報誌「みどりのきずな」第42号について

事務局より「資料3 広報誌「みどりのきずな」の原稿作成について」により説明後、記事内容について承認を得た。

議題（３）令和６年度取組状況及び令和７年度計画作成依頼について

事務局より「資料４ 緑区支え合いのまち推進計画の取組状況（令和６年度）及び計画（令和７年度）等調査票」により説明後、質疑応答を行った。

（篠原委員）

毎年このような調査票を各団体に作らせているが、これを作ってどのような意味があるのか。どのようなことに活用しているのか。

（事務局）

市の社会福祉審議会地域福祉専門部会において地域の取組を報告している。支え合いのまちを実現するために各団体の活動状況を共有して、各々の活動に少しでも生かしていただきたいと考えている。

<その他>

（廣田委員）

高津戸のデマンドタクシーの実証実験が今どれくらい利用されているのか、また、今後の予定がわかれば教えていただきたい。他の地域の参考にもなるかと思う。

（事務局）

地域づくり支援課の方に提供できる情報があるかと思いますので、後ほど提供させていただきます。

（石井区長）

補足となるが、高津戸のデマンドタクシーの社会実験については地域の方々の協力により進んでおり、来年度本格実施に向けていきたいという事で所管から聞いている。詳細はまたお知らせしたい。

○事務局

鈴木緑保健福祉センター所長が閉会挨拶をして終了とした。